

「**鉾をおさめて**」(1928)は、遠洋漁業に勤しむ漁師を歌う。北海道出身の作詞家・時雨音羽の詩に中山晋平が作曲し、オペラ歌手・藤原義江の歌でヒットした。

「**花**」(1900)は、瀧廉太郎の歌曲集《四季》の第1曲で、日本における芸術歌曲を目指して書かれた。隅田川の春の穏やかな情景を歌った、風情豊かな文語調の歌詞は、国文学者で歌人でもあった武島羽衣による。

「**荒磯**」(1902)は、格調高い水戸・光圀公の和歌に、瀧廉太郎が作曲。瀧廉太郎は結核により満23歳の若さで亡くなった。本曲は死の前年の作。

「**荒城の月**」(1901)は、七五調の歌詞と西洋音楽が融合した瀧廉太郎の代表作。詩人・土井晩翠が中学唱歌を東京音楽学校から委嘱されて作詩し、瀧廉太郎の曲は公募により選ばれた。

「**鐘が鳴ります**」(1923)は、北原白秋の詩に山田耕筰が作曲。遠くの鐘を思わせるピアノ前奏に始まり、暮れていく空を背景に、想い人を待つ感傷を歌う。

「**南天の花**」(1949)は、長崎で被爆した医師・永井隆の詩に山田耕筰が作曲。原爆を生き延びた自宅の南天の花に亡き妻のおもかげをみる、深い悲しみがさりげなく歌われている。

「**この道**」(1927)は、北原白秋作詞、山田耕筰作曲による童謡。前半(1、2番)は白秋が晩年に訪れた北海道、後半(3、4番)は白秋の実家がある九州・柳川の情景が織り込まれている。

「**天の原**」(1934)は、作曲者の貴志康一がベルリン留学中に同地で出版した《7つの日本歌曲》所収。奈良時代、唐へ留学した阿倍仲麻呂が詠んだ「古今和歌集」の歌に曲を付けたもの。

《**沙羅**》(1936)は、国文学者で東京音楽学校教授でもあった清水重道の詩に、同校教授の作曲家・信時潔が作曲した独唱曲集。本日は全8曲のなかから「**あづまやの**」「**北秋の**」「**鴉**」「**行々子**」の4曲をお届けする。

「**平城山**」(ならやま)は、奈良県北部にある丘陵地帯で、奈良という地名の語源の一つとされる。「**甲斐の峽**」は、山梨県甲府盆地の北、「日本五大名峽」の一つである昇仙峽かと言われている。「**九十九里浜**」は、千葉県東部の九十九里浜を歌う。以上3曲(1935)は三部作をなし、高知県宿毛の歌人・北見志保子の短歌に、同じく高知出身の作曲家・平井康三郎が作曲した。

「**椰子の実**」(1936)は、明治の文豪・島崎藤村の詩。友人の民俗学者・柳田國男が伊良湖岬(愛知県)に滞在した際の体験談を、藤村が聞いて詩にした。大中寅二の作曲、東海林太郎の歌でリリースされた。

「**かわいいかくれんぼ**」(1951)の作曲者、中田喜直は本土で特攻隊要員として終戦を迎え、戦後、作曲家として活躍。詩人サトウハチローとのコンビで数々の

名作を世に出した。

「夕方のおかあさん」(1954)も、サトウハチローと中田喜直のコンビによる傑作の一つ。「ごはんだよ」というおかあさんの言葉が、聴く者を在りし日に誘う。

「小さな空」(1962)は、武満徹による作詞作曲で、連続ラジオドラマ『ガン・キング』の主題歌。子どもの頃の懐かしい感情に、ふと胸を突かれるような歌である。

「早春賦」(1913)は、文部省唱歌の傑作として長年愛唱されてきた。長野県中部の安曇野一帯の初春の風景を描いた吉丸一昌の歌詞に、中田喜直の父・中田章が作曲。

「夏の思い出」(1949)の歌詞は、江間章子が1944年に訪れた尾瀬のミズバショウに感動して書いた。中田喜直の作曲によりNHKのラジオ番組で発表され、尾瀬は一躍、人気観光地となった。

「ちいさい秋みつけた」(1955)も、中田喜直がNHKの特別番組のために作曲。歌詞は、サトウハチローが自邸のハゼノキが紅葉する様を見て書いた。

「雪の降るまちを」(1951)は、NHKラジオドラマ「えり子とともに」の挿入歌。ショパン「幻想曲 へ短調」との類似が指摘されているが、中田喜直はショパンに傾倒するピアニスト志望の青年だった。

「出船」(1928)は、作詞者の勝田香月が、石川啄木ゆかりの地を訪ねる旅路の大滝温泉で書いたもの。勝田を見出した作曲者の杉山長谷夫は、多ジャンルにわたって作品を残した。

「初恋」(1938)は、歌曲集《啄木によせて歌える》の第1曲で、オペラ歌手・三浦環に捧げられた。息をのむほどに美しい旋律をつけたのは、俳優の経歴も持つ作曲家・越谷達之助。越谷は三浦のピアノ伴奏者を務めた。

「津軽のふるさと」(1953)は、美空ひばりのシングル盤レコードとして発売。青森県のご当地ソングでもある。作詞作曲の米山正夫は、シベリア抑留から復員して、初期の美空ひばりのヒット曲を数多く手掛けた。